

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653092

研究課題名（和文） 女性の教養と理想的女性像に関する比較社会史的研究

研究課題名（英文） Comparative study of social history on the culture and ideal of educated women

研究代表者

稲垣 恭子 (INAGAKI KYOKO)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40159934

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀後半から20世紀前半における日本・イギリス（イングランド）、フランスにおける女性の教養の特質とその社会的意味について、lady, dame, 「たしなみ」等の概念を軸に分析・考察した。女子中等教育の拡大とともに、そうした概念が教育ある女性のモデルとして再構成されていったことを、学校教育・学校文化、作法書、雑誌メディア等の資料をもとに明らかにし、比較社会史研究の土台をつくった。

研究成果の概要（英文）：This study considers the features and the social meanings of the culture and education of women among Japan, England and France from the second half of 19th century to the first half of 20th century in relation to the concepts of 'lady', 'dame' and 'Tashinami'. The analysis of girls' school culture, manner books and women's magazine in each society made clear that these concepts were re-constituted as a well-educated woman's model with the expansion of girls' schools during the period. This study provides the foundation of the further comparative studies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	0	1,200,000
2010年度	1,200,000	0	1,200,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	180,000	3,180,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教養・たしなみ・理想的女性像

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、日本における教養の歴史社会学的研究については、近代日本の大学や知識人層の教養概念を軸に、理論的・実証的研究が

精力的に行なわれ、成果が蓄積されてきている。そのなかで、旧制高校を中心とする教養主義的な学生文化から現代の大学・学生文化にいたる変容や、知識人の社会的位置や意味

などが明らかにされてきた。しかしそこで対象とされているのは、主として男子の学生文化あるいは男性知識人の教養であり、女性の教養についてはほとんど視野に入れられていなかった。

しかし、さまざまな領域で教養の衰退が取り上げられつつある現代の状況のなかで、男性の教養文化とはまた異なる、身体作法や社交まで含む女性の教養の系譜をたどり直すことは、現代の教養文化を再考する上でも重要な視点を提供するものと考えられる。

このような視点にたった女性の教養の歴史社会学的研究はまだあまり多くない。研究代表者は、戦前期における高等女学校を中心とする女学校・女学生文化の研究を行ってきたが、そのなかで女学生の文化が読書から和洋の音楽、スポーツ、稽古事などを含む幅広い教養を志向するものであったことを明らかにした。また、当時の女性向け雑誌や作法書においても、立ち居振る舞いから衣服や化粧法等、身体や外見の作法から手紙の書きかた、音楽、文学、装飾等にいたる素養を身につけることが「たしなみ」ととらえられていたこと、それらが良妻賢母主義と結びつきながら、理想的女性像として浸透していったことも指摘した。本研究は、これらの知見を基礎としながら、女性の教養文化の系譜をとらえ直そうとする試みである。

一方、近年の欧米の社会史・文化史研究においては、身体作法や社交を含む女性の教養が、polite society の形成に重要な位置と役割を占めていたことが注目されつつあった。イギリス、フランスにおいては、女子中等教育が拡大しはじめる 19 世紀半ば以降、女性の教養が中産階級文化の核として重視されるようになる。科学的思考と同時に文学、芸術の素養をベースとした教養が、理想的な女性像として形成されていったのである。

このような研究を土台としながら、女性の教育と教養文化の関係を比較社会的な視点から検討したいと考えるようになったのが、本研究の開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

以上のような研究の背景から、本研究は、日本・イギリス（イングランド）、フランスにおける女性の教養の特質とその社会的意味について、家庭教育や学校教育、雑誌メディア等と関連づけながら、比較社会的な角度から明らかにするための土台をつくることを目的としてスタートした。

比較社会的なアプローチをとることで、それぞれの社会における女性の教養概念の特徴やその社会的意味について分析すると同時に、女性の教養の類型化を行なうことを目指した。それによって、女性の教養についてのクロノロジカルな変化と同時に、教養の

類型比較というカテゴリカルな比較分析が可能になる。

このような視点にたった研究は、現代の女子教育さらには現代の高等教育・教養一般について考えていく上でも重要である。女性の教養文化や教養観の系譜を跡付けることによって、教養の変質をめぐる現代的課題を新しい角度から再検討するための示唆を得ることができる。

## 3. 研究の方法

日・英・仏における女子中等教育と生徒文化に関する資料の収集と分析、女性向け雑誌、マナーブック、家政書、小説の分析を行ない、それぞれにおける女性の教養観、理想的女性像について考察を進めた。

(1) 日本：戦前期の教養女性の類型化と戦後における変容について分析・考察した。

①戦前期の高等女学校の文化に関する資料（調査資料、校友会誌、記念誌等）、及び女性向けの礼儀作法書、雑誌（『婦人公論』『婦人倶楽部』『主婦の友』等）の記事分析を行なった。

②その際、「良妻賢母」「モダンガール」「職業婦人」などの女性カテゴリーと関連づけながら分析・考察した。

③それらの分析をもとに、日本における教養女性の類型化を行なった。

④戦前・戦後の女性教養人についていくつかの事例分析を行なった。

⑤理想的女性像と教養の関係について総合的に考察した。

(2) イギリス（イングランド）：lady, respectable woman の概念を軸にしなが、女子パブリックスクールの教育と女性向け雑誌・作法書等の分析を行なった。

①lady 概念の整理：19 世紀イングランドにおける理想的女性像としての lady 概念について、先行研究を整理した。

②女子パブリックスクールの教育と生徒文化について資料の収集と分析を行なった。資料としては、ISA(Independent School Association)、GSA(Girls School Association)、及び Girls School Yearbook の関連資料を収集し、学校タイプ、カリキュラム等について分析した。

③事例研究として、Cheltenham Ladies' College, Roedean School, St. Paul's Girls School, North London Collegiate School, The Mount School の資料収集と訪問インタビュー調査を行なった。

④19 世紀半ば以降に相次いで出版された女性向け雑誌の状況について概観した上で、1895 年から現在まで継続している“The Lady”誌を取り上げ、その記事内容の分析を行なった。また、“The Lady”出版社で、本誌の歴史と現在の状況についてインタビューを行

なった。

⑤女性の教養の指南書として長く愛用された Mrs. Beeton の 家政書 "Mrs. Beeton's Household Management" をもとに、イギリスにおける女性の教養について分析・考察した。

(3) フランス: dame, honnête femme 概念を軸にしなが、リセの教育と女性向け雑誌・礼儀作法書の分析を行なった。

①dame, honnête femme 概念について、先行研究を整理した。

②リセに関する先行研究を整理し、代表的なリセの資料を収集した。

③近代ヨーロッパの礼儀作法書の最初のモデルとされるバルダサル・カスティリオーネ『宮廷人の書』(1528)に焦点をあてて、その内容と特徴を分析した(喜名)。

#### 4. 研究成果

研究方法の手順にそって資料収集・分析・考察を行なった。その結果の概要は以下のようにならめられる。

(1) 共通に見られる特徴として、科学的・学問的世界から家庭生活にいたる広い領域にわたって、また姿勢や身のこなし、言葉づかい、会話術といった身体作法から社交まで含んだ「教養」概念を軸として、理想的女性イメージが形成されていったこと、19世紀後半から中産階級の女性の進学が高まっていったことと対応して、教育を受けた教養女性イメージとして再構成されていったこと、1970年代以降、インフォーマル化が進むのにもなつて、「たしなみ」や「慎ましき」といった価値や、lady, dame 等の概念や呼称が衰退していったこと、等が挙げられる。

(2) 日本における女性の教養を特徴づけることばとして「たしなみ」を挙げることができる。戦前期の女学校教育、婦人雑誌、礼儀作法書の分析から、教養女性の類型として抽出したのが、図1である。

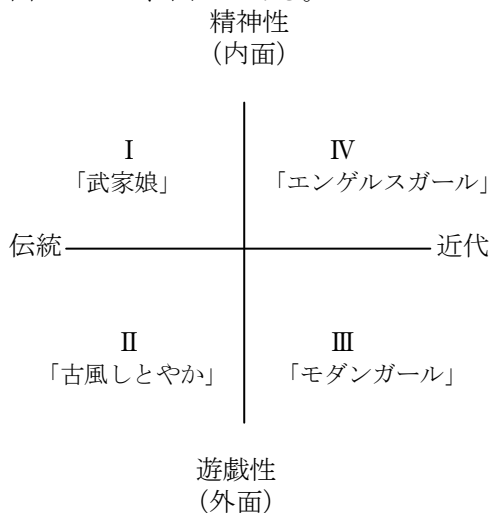


図1 教養女性の4類型

従来、III、IVを中心にとらえられてきた教養女性の類型にI、IIを加えることによって、戦前から戦後にいたる教養女性のタイプと変容の過程をよりダイナミックにとらえることができる。

(3) カスティリオーネの「宮廷人」は、オネットオム、ジェントルマンへと続くルネサンス期の理想的人間像であり、『宮廷人の書』は最初の紳士教育の書であり、フランスをはじめヨーロッパに多大な影響をあたえた。またこの書は、ルネサンス期の貴婦人(dame)の理想を論じていることも注目に値する。この書の分析から、中世以来、貴婦人はモルガヌ Morgane-メリュジーヌ Mélusine を二つの典型とする枠組みで語られることが多かったが、カスティリオーネはそうした観点をもたないことに注目して、その内容を分析した。彼の貴婦人像は、男性と同等の教養を持ち、また文化を洗練させていく役割を担う存在として描かれている。こうした点は、女性を神聖視する視点にもつながるが、それはまた、近代社会におけるエリート階級の新しい配偶者像に合致するものでもあったことを明らかにした(喜名)。

(4) フランス、イギリスの女性の教養概念、教育、雑誌等の資料の分析から、フランスの宮廷やサロンをモデルとした女性の教養や理想的女性像がイギリスの女性の教養概念に大きな影響力をもっていたことが明らかになった。女子パブリックスクールや女性向け雑誌、家政書の分析から、フランス語、フランス料理、ダンス、ファッション等がイギリス女性の教養にとって欠かせないものであったことがわかる。さらに女子教育の拡大のなかで、科学、スポーツ、スピーチ等の能力も重視されるようになり、独自の教養ある中産階級の女性のイメージと自意識が重なった lady 概念が再構成されていったことが明らかになった。

(5) 第二次大戦後とくに1970年代以降、「たしなみ」や'lady', 'honnête femme'等の概念やイメージは急速に衰退していった。女子の高等教育の拡大、ジェンダーに関する意識の変化とインフォーマル化の進展等がその背景となっている。これらの変化をふまえて、現代の教養概念を再考していくことが今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Inagaki, Kyoko Communities of Nostalgia: friendship in girls' schools in pre-war Japan. *Conceptualising*

*Friendship; its meaning and practice in time and place. International Institute for Asian Studies, refereed, Leiden University, 2010, 189-202*

②稲垣恭子 武家娘と近代—「女のいくさ」と言説空間—、研究紀要 教育・文化・社会、京都大学大学院教育学研究科教育社会学研究室紀要、査読無、第12号、2009、1-10

〔学会発表〕(計3件)

①Inagaki, Kyoko Communities of Nostalgia: Friendship among girls' school students, International Conference for 'Conceptualising Friendship', its meaning and practice in time and place., Leiden University, 2010, Oct.

②稲垣恭子、教師と学生のコミュニケーション—「私淑」とメディア、日本教育社会学会第62回大会、2010.9

③稲垣恭子・山崎貴子、近現代日本における「師弟関係」とその変容、日本教育社会学会第61回大会、2009.9

〔図書〕(計5件)

①稲垣恭子編、教育文化を学ぶ人のために、世界思想社、2011(288)

②稲垣恭子、「私淑」とメディアクラシー、北澤毅編〈教育〉を社会学する、学文社、2011、174-199

③稲垣恭子、液状化する「不幸」、子安増生編、心が活きる教育に向かって、ナカニシヤ出版、2009、182-183

④稲垣恭子、私淑とシシユク、矢野智司・桑原知子編、臨床の知—教育心理学と教育人間学からの問い、創元社、2010、221-223

⑤稲垣恭子、教育社会学、井上俊・長谷正人編、文化社会学入門、ミネルヴァ書房、2010、158-159

〔その他〕

(講演)

①稲垣恭子、女子学生論の系譜—亡国論 vs 興国論、歴史から大学の現在を考える—日本の高等教育130年余年、椋山人間学研究センター主催シンポジウム、椋山女学園大学、2009.11

②稲垣恭子、近代神戸の女子教育、行吉学園創立70周年記念講演会、神戸女子大学、2010.11

③稲垣恭子、師弟教育の現在—人生の師と学校の先生と—、第57回コルモス宗教文化研究会基調講演、京都国際ホテル、2010.12

④稲垣恭子、師弟関係の変容とアカデミック・コミュニティの現在、関西学院大学神学部研修会、2011.6

⑤稲垣恭子、女学生の昔と今、大津市比叡平市民センター講演、2011.7

⑥稲垣恭子、現代の中学生問題、大津市比叡平市民センター講演、2011.11

⑦稲垣恭子、女学生の昔と今、関西大学・すこやか市民講座第IV期、2012.1

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲垣 恭子 (INAGAKI KYOKO)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40159934

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

喜名 信之 (KINA NOBUYUKI)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：00161521

竹内 洋 (TAKEUCHI YO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：70067677